

審査の結果の要旨

氏名 堀抜 文香

本研究は、血液がん医療において、医師が患者の希望や意向を知り、それを理解したことを患者に伝えるコミュニケーションに着目し、コミュニケーションの内容や医師の行動とその実践状況を明らかにし、臨床への示唆を得ることを目的としたもので、下記の結果を得ている。

1. 血液がん患者 11 名に、医師とのコミュニケーションの経験やそれに対する考えを聞き取る半構造化面接調査を実施し、内容分析の手法を参考に質的に分析した。その結果、患者の希望や意向を知り、それを理解したことを患者に伝える医師のコミュニケーションは、基本的態度に加え、〈尋ねる〉および〈伝える〉という行動があった。

基本的態度は、医師が患者の顔を見て話すこと、挨拶や日常会話をする事等で、コミュニケーションの場の雰囲気や和らげ、患者と医師の距離を縮める役割があった。

〈尋ねる〉は、【病気・治療】に関する患者の疑問や質問、困っている症状、【生活・人生】に関する患者の希望や意向を知ろうと、医師側から患者に尋ねることであった。

〈伝える〉は、医師が、【病気・治療】に関する患者の疑問や質問に答えることや、困っている症状に何らかの対処をすること、【生活・人生】に関する患者の希望を尊重しながら医療を提供していく姿勢を患者に伝えることであった。

2. 結果 1. および先行研究をもとに、医師が患者の希望や意向を知り、それを理解したことを患者に伝えるコミュニケーション行動 31 項目を作成した。31 項目は、「I 基本的態度」「II 情報提供」「III 病気・治療」「IV 生活・人生」の 4 領域を構成する。なお、「III 病気・治療」と「IV 生活・人生」は結果 1. にもとづいて、「III-1 病気・治療について尋ねる」「III-2 病気・治療について伝える」「IV-1 生活・人生について尋ねる」「IV-2 生活・人生について伝える」とした。

患者 61 名と主治医 15 名 (61 ケース) を対象に、上記 31 項目に関する質問紙調査を実施した。患者には主治医との、医師には当該患者との自身のコミュニケーションについて、これまでの経験を振り返り「全くない=0」「ほとんどない=1」「ときどきある=2」「毎回=3」の 4 件法で頻度を尋ねた。回答は、患者と医師それぞれの 31 項目の記述統計、および I~IV-2 の合計平均値を算出した。また、患者と医師それぞれの評価と関連する要因を重回帰分析にて検討した。さらに、I~IV-2 に関する患者と医師の評価の違いを Wilcoxon の符号付き順位検定にて、患者と医師の評価の関連を重回帰分析にて検討した。

- 2.1 患者の評価は、I～IIIの合計平均値が2（ときどきある）を上回り、医師の評価も2に近似した。一方、IVの合計平均値は、患者の評価、医師の評価ともに1（ほとんどない）に近似した。
- 2.2 患者の評価と関連する要因は以下の通りであった。すなわち、I および II は患者の Performance Status (PS) が高い場合に有意に高く、III-1 は高齢患者ほど有意に低く、III-2 は、PS が高い場合に有意に高かった。また、IV-1 は PS が高く、主治医受持ち期間が長いほど有意に高く、IV-2 は高齢患者ほど有意に低く、PS が高く、主治医受持ち期間が長いほど有意に高かった。
- 2.3 医師の評価と関連する要因は以下の通りであった。すなわち、I は女性医師が有意に高く、II は PS が高い場合に有意に高かった。III-1 は PS が高い場合に有意に高く、III-2 は女性医師が有意に高かった。
- 2.4 患者と医師の評価の違いは、I～III-2 の合計値は患者が医師よりも有意に高かったが ($p<0.001$)、IV-1・IV-2 は両者の回答に統計学的な差は認められなかった。
- 2.5 「IV 生活・人生」に関するコミュニケーションに対する患者の評価と医師の評価には関連が認められた。すなわち、IV-2 の患者の評価は、高齢患者ほど有意に低く、PS が高く、主治医受持ち期間が長く、IV-1 の医師の評価が高いほど有意に高いことが示された。

以上、本論文は、血液がん医療において、患者の意向や希望を知り、それを理解したことを患者に伝えるコミュニケーションの具体的な内容や医師の行動、それに対する患者と医師の評価および双方の評価に関連する要因、両者の評価の違いや関連を明らかにした。本研究は、これまでほとんど明らかでなかった血液がん医療におけるコミュニケーションの実態を示すものである。また、「生活・人生」に関するコミュニケーションに対する患者と医師の評価には関連が認められることを明らかにしたことは、患者－医師間コミュニケーションに新たな視座をもたらすと同時に、その発展に貢献することが期待される。よって本研究は、学位の授与に値するものと考えられる。